

# ゾラの『饗宴』とオスマンのパリ大改造（上）

尾崎和郎

はじめに

一 ナポレオン三世とパリ大改造

二 ボナパルチスト、オスマン

三 オスマンによるパリの整備と美化

1 道路の整備・建設

2 公園や広場の整備・建設

3 建造物の修復・建設

4 上・下水道の整備・建設

5 墓地の整備・建設

四 地方都市と諸外国におけるオスマニザシオン（オスマン

化）都市の改造・整備

五 オスマンにたいする非難

1 美的センス

2 古いパリの破壊

3 追いたてられる庶民

4 土地・不動産の接収と投機

5 オスマンの幻想物語 (Comptes fantastiques

d'Haussmann オスマンの幻想的計算)

おわりに

## はじめに

エミール・ゾラ（一八四〇—一九〇二）が一八七一年から一八九三年までの約二〇年をついやして書きあげた大著『ルーゴン・マッカール双書』二〇巻には、〈第二帝政下のある一族の自然的社会的歴史〉という副題が付されている。しかし『ルーゴン・マッカール双書』は「第二帝政下の一家族の歴史」を描いたというよりも、むしろ逆に、ルーゴン・マッカール一家の活動や生活を通して第二帝政の政治や社会を描いたものというべきである。すなわち、ルーゴン・マッカール家の人々が所属する社会や、かれらが関係する職業やグループ、たとえば、農村社会、金融界、政界、都市中産階級、下層階級、商人、軍隊、芸術家の世界、宗教界など、第二帝政の政治と社会をもっとも顕著に特徴づける二〇の領域をとりあげ、そのなかでのルーゴン・マッカール家の人々の生活や活動を通して、第二帝政そのものを敵意と怨恨とをこめて描いたのである。

一八七二年に発表された『ルーゴン・マッカール双書』第二巻『饗宴』<sup>(1)</sup>は、ギー・ロベールの表現を借りるならば、

「帝政を特徴づけた投機と奢侈と淫蕩」の世界を描いており、『ルーゴン・マッカール双書』の他の作品同様第二帝政そのものをきびしく告発しているが、その背景となっているのは、皇帝ナポレオン三世とセーヌ県知事（パリ市長）オスマンによるパリ大改造である。そして、都市改造に伴う土木事業、土地の収用、不動産の売買や投機などがこの作品の骨格となっている。しかし、そこに描かれていることは当然フィクションであり、事実と相違している筈である。

それでは、実際のパリ改造は一体どのようなものだったのだろうか。それを知ることがまず何よりも重要なことである。大改造の事実を正確に知り、事実とフィクションとを区別しておかなければこの作品を十分に理解することはできないであろう。それゆえ、『饗宴』を文学的に論ずるのはつぎの論稿にゆずるとして、本稿の主要な目的は作品の母胎ともいえるべきパリ大改造の実体を正確に把握することにある。

### 〔註〕

(1) La Cité の日本語訳として、たとえば映画の邦題など

では『獲物の分け前』となっており、また、ゾラの専門研究者以外のフランス文学研究者のあいだでも『獲物の分け前』という訳が好んで用いられているようであるが、私には『饗宴』という古くからの訳語がこの作品にはふさわしいように思われる。『獲物の分け前』という訳はこの作品の内容やゾラの文学世界をよく知らない素人のものである。その理由は稿をあらためて述べるつもりである。

(2) Guy Robert, *Emile Zola. Principes et caractères généraux de son œuvre*, Les Belles Lettres, 1952, p. 74.

### 一 ナポレオン三世とパリ大改造

一八五一年二月二日のクーデタによって権力を手中におさめたルイ・ナポレオンは、国民の心を引きつけるためにフランスに「繁栄」をもたらし、国民を「裕福」にする政策、いわゆる「一二月二日の経済政策」をいち早く実行に移すのであるが、その効果はすぐにあらわれ、早くも一八五二年にはフランスの諸都市が顕著な変貌をとげはじめ<sup>(2)</sup>。そして、この都市の変貌のもっともきわだった例が

パリ市である。

実際、パリはナポレオン三世の第二帝政時代（一八五二—一八七〇）の約二〇年の間に、「まるで一挙に一八世紀から二〇世紀に移行したかのよう<sup>(3)</sup>」に大変貌をとげ、「花の都パリ」ということばにふさわしく、世界でもっとも美しい首都となり、しかも、「当時形作られた市街構造は本質的に一九六〇年代まで時代の試練に堪えたのである<sup>(4)</sup>」。パリがあらたな変貌を強いられるのは一九六八年の五月革命以後であり、それまでの約一〇〇年間、パリは第二帝政時代のパリだったのである。パリが一九世紀のないし第二帝政的首都から二〇世紀的首都へと変身するのは一九八〇年以後であるといっても過言ではあるまい<sup>(5)</sup>。

ところで、パリを改造し、変貌させるといふ大事業を断行ないし強行したのは、セーヌ県知事オスマン Georges Eugène Haussmann（一八〇九—一八九二）であるとされている。実際、深い怨恨と激しい非難をこめて彼に向けられた〈パリの王様〉〈副皇帝〉〈オスマン・パシヤ〉〈オスマン・フー一世〉〈腹裂き男爵〉〈土地収用のシクスト・カーン〉などのいい方は、彼がパリ大改造の張本人である<sup>(6)</sup>とみなざれていたことを示すものである。そして、オスマンによる

パリ改造、あるいはオスマン式の都市の改造・整備を意味するオスマニゼーション(haussmannisation (オスマン化))とかオスマニゼーション(haussmanniser (オスマン化する))という語さえも生まれた。<sup>(7)</sup>しかしジャン・デ・カールが書いているように、「この事業の功罪のすべてをオスマンただひとりに帰することほど間違つた考え方はない」<sup>(8)</sup>。オスマン自身も、「私は個人的に何も計画をたてる必要はなかったから、すべて皇帝の頭のなかで構想が完全にできあがっていたからである」と一八六一年に書いているが、オスマンは「きめられたことを実行する」<sup>(9)</sup>たんなる「有能な行政官」であり、時に「恥知らずな下僕」にすぎなかった。<sup>(10)</sup>

パリを美しく衛生的な都市にするためにパリの大改造を望み、それを実行に移したのは、ほかならぬナポレオン三世であった。「パリ改造は彼の計画し実行したるものもろの事業のなかの一つにすぎなかつたとしても、彼にとつておそらくもつとも貴重な事業だつたであろう。彼は権力の座にある間ずっとそれに専念し<sup>(11)</sup>、「情熱をもやして」<sup>(12)</sup>さえもいたのである。

「彼はパリ市を研究し、国立図書館から建築の本を借りて読み」<sup>(13)</sup>、「工事図面を作成し、パリの地図の上に新しい道

路網を描いた<sup>(14)</sup>。そして、サン・クルーの自室にパリの大きな地図をおき、重要性の度合に応じて計画予定の道路に青・赤・緑・黄などの色をつけた。このようにして彼は、オスマンにパリ改造の計画を立てさせる以前に、自分自身で構想をねり、立案し、「老朽家屋の密集した地域の取りこわし」、「左岸の大道路の貫通、中心部と東部を横切る道路の建設」あるいは「駅に通ずる道の完成」などを決定していた。<sup>(15)</sup>

このような大所高所からの決定ばかりか、さらにこまごましたことにまで彼は口出しをした。そこにはいくらか「気取り」があつたようではあるが、彼は使用すべき建築材料を指示しさえもした。<sup>(16)</sup>たとえば、パリ中央市場の建設にあつて、一八五一年建築家バルタールが建てた一つのパビリオンが、「中央市場の城砦」と呼ばれるほど重々しくみえた時、彼は「私が望んでいるのは傘なのだ」といつて変更を命じた。<sup>(17)</sup>そして、この命令ないし指示のもとに、バルタールは一八五四年から一八六六年にかけて、(メタル建築)の一〇個のパビリオンを建てたのである。<sup>(18)</sup>

ナポレオン三世がこれほどパリ改造に執着したのは、彼が「世界一の都会であつたロンドンで長期間生活し、近代

的都市建設の必要性を痛感していた」からである。<sup>(19)</sup> 彼は伯父ナポレオン一世がおこしたナポレオン帝政の復興を幼少のころから自己の使命ないし天職とみなし、そのために反乱・亡命・追放・逮捕・投獄・脱獄など波瀾万丈の生活を送ったが、その間にたびたびロンドン生活を体験した。すなわち、一八三二年に三か月、一八三二年一月から一八三三年五月までの六か月、一八三六年のストラスプールの反乱失敗後一八三七年までの短期間、一八三八年一〇月から、ブローニュの反乱失敗によってアム牢獄に幽閉される一八四〇年八月までの約二年間、そして、アム牢獄からの脱獄に成功して渡英した一八四六年五月から、ポナバルト一族の追放令（一八三二年）が廃止されてフランスに帰る一八四八年一〇月までの約二年半など、彼はかなり長い年月をロンドンで過した。<sup>(20)</sup> そしてこのロンドン生活を通じて、「ロンドンが公共生活に関してパリよりもはるかに整備され、比較にならないほど進歩している」<sup>(21)</sup> ことを発見したのである。

もちろん、当時のイギリスの労働者の生活は極度に貧しく、ロンドンの東部や南部の環境は劣悪そのものであった。シチー周辺も道路網は整備されておらず、交通渋滞も解消

されてはいなかった。また、ロンドン全般に下水道が不足し、テムズ河はよごれ、都市環境は決して満足すべきものではなかった。それでも、ロンドンはフランス国民には見習うべきすばらしい首都であった。それというのも、一六六六年の大火の際に一万戸以上の住宅が焼失し、四〇〇本の道路が損壊し、二六街区のうち一五街区が消滅した結果——というよりもそのおかげで、ロンドンがごみごみした中都市から風通しのよい近代都市に変貌していたことは事実だったからである。ロンドンには、多数の道路が交差する大きな広い道が市の中心から伸び、いたるところに広場や緑の空間が作られていた。車道には排水溝と歩道が付設され、一九世紀初頭にはガス灯もそなえつけられた。<sup>(22)</sup>

このようなロンドンにたいして、一九世紀中葉のパリは、「ルイ一四世時代のパリの延長線上にあり、大革命時代のパリであった……モンマルトルやベルヴィルやヴォジラールは村であり、モンマルトルではブドウが栽培され、いつも風車がまわっていた……曲がりくねった、狭くて薄暗い道……ガス灯はもつともエレガントな地域にのみ設置され、それ以外の所では灯油ランプであった」<sup>(23)</sup>。

ジャン・デ・カールは一八五三年のパリは「まだバルザ

ックのバリである」として、つぎのように書いてはいるが、彼の文章はきわめて適切に当時のパリを描きだしているように思われる。<sup>24</sup>

『人間喜劇』の登場人物は『饗宴』の登場人物に先行する。ヴォートラン、ペール・ゴリオ、リュシアン・ド・リュバンプレ、ラストイニヤックたちは、今日ではもはや例外的にしか残っていない古めかしい迷路にわれわれを連れていく……フランス大革命は多くのものを破壊したが、街路を変貌させることを忘れた。理論的には平均一二メートルとなっている道も、実際には七メートル以下であった。中心部では五メートル以下のところもあった。それゆえ、ヴィエイユ・ランテルヌ（古提灯）街は二人の人間がすれ違ふのがやっとだった。昼間でも薄暗い路地が数えきれないほどあった。道は曲がりくねって狭く、でこぼこだった。通りは時間によって人々でこった返したり、無人の危険地帯となったりした。両側には中世風の間口の狭い高い家が立ち並んでいた。しかしそれだからといって、パリは中世にできあがった町だと結論しては

ならない。もつとも古い建物でも一六世紀に遡るにすぎず、大抵の建物は一七、八世紀のものだった。ノートル・ダム寺院やサント・シャペル寺院のような宗教的建造物のみが十字軍時代の信仰の証しだった……

歩道中央の排水溝にはゴミと悪臭がつまり……路地はわずかの雨でも小川となる。それゆえ、いくらお金を払って屈強な腕を借り、小川となった路地を飛びこえるのである……シャンゼリゼは夜間ぶらぶら歩くことが不可能な田舎である。夜になると、バルザックのバリはウジェーヌ・スューのバリにかわる。一八四二年に発表されたスューの有名な小説『パリの秘密』はブルジョワを震撼させたが……人々が大衆小説家たちの想像力を非難したのは間違っていた。小説家たちは誇張していたわけではない……

〈ガス灯のあふれる光〉で照らされたリシュリュー街——ルイ・フィリップ時代右岸でもつとも美しかった大通りの一つ——を一步離れると、そこはゴミや汚物や湿った壁が出す悪臭のただよう暗闇である……パリのほとんどすべての通りは悪臭ふんぶんたる不潔な場所であり、むき出しの下水道である……

一八五〇年以前のパリ市民は、自分たちの足の下に犯罪の Париがあることを知っていた……パリ市の中心は一ヘクタールに一〇〇〇人が詰めこまれた過密のスクラム街の中核であった。

パリ市を囲む城壁に沿った四列の街路樹の下の芝生上で、住民はボール boule 遊びを楽しんだ。ここから boulevard (緑のボール) という表現が生まれ、それが少し変化して boulevard となったのである……

一八四一年、ティエールはパリを城壁で囲んだ。パリの防備が不十分だと見なしたからである。この環状線は軍用道路と呼ばれたが、今日の外側のブルヴァールに相当する。二つの環状線の間、ヴォジラールやグルネルやパシーなどの村があり、そこには酒場や果樹園や畑があった。

屠殺場にひかれていく牛・ヤギ・ロバの群が毎日パリを横切り、すでに始まっていた産業革命の波のなかで中世的イメージをよみがえらせていた……外務省の建物ができあがったところであった。シャンゼリゼは一軒の家もない、草に覆われた、まんまるい円形広場であった。あのルノートルによれば、それは王家の

森のなかの広場) に似ていた。鉄道の (発着所) はまだ控えてあった。汽車の (発着所) が誇らしげな駅となるのは第二帝政時代になってからである……

アナキーで統一がなく、不健康で下品なルイ・フィリップ時代のなパリは、陰謀と病気の源だった。すぐに伝染病の餌食となった。四年前 (一八四九年) のコレラでは死者一万九千人……

一八五一年のパリの人口は一五〇万三二六二人であった……これらの人をどこに住まわせるべきか。ヴィクトル・ユゴーの声にちがいない一つの声が答えるであらう。(「いずこにも無し!」と……)

パリの市民生活は二世紀前よりも悪い。パリはルイ一四世時代からほとんど変わっていないにもかかわらず、人口だけは三倍になっている。悲劇は明白である。七〇パーセントのパリ市民が、生きるのに必要なものをほとんどもっていないのである。」

パリを訪れたイギリス人はパリの汚なさや不快さについてたびたび語るがあったが、イギリスに滞在していた

ルイ・ナポレオンはイギリス人のこの種の侮蔑や嘲笑の声を耳にして、パリをロンドンと比肩する都市にしたいという思いに駆られた。そればかりか、ロンドンを越えて、「世界でもっとも美しい都市」「ヨーロッパの首都」「首都のなかの首都」にしたいと思った。彼はアムの牢獄に捕えられていた一八四二年、「私は新しいアウグストスになりたい、なぜなら、アウグストスはローマを大理石の都市にしたからである」といっているが、「彼の野心の一つは、パリに彼自身の頭文字を刻みこむことであり、建造物に彼の治世の消しがたい痕跡を残すことであつた」。

〈威信〉や〈威光〉、〈大きなこと〉や〈大計画〉にたいする好み<sup>(28)</sup>が、ナポレオン三世をパリ改造に向かわせた最大の理由であるが、そのほかに二つの理由ないし動機をあげることができる<sup>(29)</sup>。

その一つは大規模な公共事業によつて経済活動を刺激することであつた。ナポレオン三世は〈馬上のサン・シモン〉と呼ばれるように、亡命中あるいはアムの牢獄に幽閉中、サン・シモン主義的経済学の文献を読み、経済的發展の仕組みについてかなりの知識を蓄えた。その結実の一つが著書『貧困の絶滅』である。その基本思想は、産業の振興に

よつて経済的發展を促せば国民を豊かにすることができるといふものであるが、彼はパリ改造という大事業が一方では経営者や実業家を富ませ、他方では労働者や職人などに仕事を与え、彼らを失業や貧困から救済することができると考えたのである。

しかも、彼の望むところは、「パリをフランスの経済活動の中心にすること」であり、<sup>(30)</sup>そのためには、商品や物資や職人や労働者が迅速に移動しうるように、ごみごみした狭い道路を広げる必要があつた。パリ改造とはこの経済的必要性と、パリの美化とが結びついた事業である。そして、美化は必ずしも表面的な美化にとどまらず、パリを衛生的都市にすることもであり、また、公園や広場を整備することによつて、パリ市民に憩いの場や遊びの場を提供し、生活環境を豊かにすることもあつた。もちろん、こうしてパリ市民の生活を向上させ、自己の人氣を高めることによつて、彼はクーデタという暴力的手段で手にいれた權力をゆるぎないものにしよつたと思つたことはいふまでもない。

パリ改造のさらにもう一つの動機は、戦略上の動機、いわゆる秩序維持のためであつた。むろん、この動機を必要以上に強調することは大きな誤りを犯すことになるが、ル



イ・ナポレオンがこれを念頭においてパリ改造を行なったことは疑いえないところである。「狭い道のあるロマンチックなパリは民衆の暴動に大きな便宜を与えた。すなわち、バリケードを築いて道路を遮断することがきわめて容易であった」とプラダリエが書いてるように、<sup>(31)</sup>民衆は為政者の弾圧が度をこし、不満が高ずるとしばしばバリケードを築き、命を賭して権力と戦った。バリケードにたてこもった民衆ほど為政者にとって不愉快なものはないが、バリケードを強力な武器として権力を悩ませた一九世紀パリ市民の主要な暴動や反乱や革命を年代順に列挙するとつぎのようになる。<sup>(32)</sup>

- 一八二七年——国王シャルル一〇世による下院解散時の暴動。翌年初頭ヴィレルール辞職
- 一八三〇年——七月革命
- 一八三二年——サン・ジェルマン・ロセロワの暴動
- 一八三三年——民衆に人気のあるラマルク將軍の葬儀に際しての蜂起。市街戦となり死傷者八〇〇名
- 一八三四年——共和主義者の暴動。市街戦。ドミエのリトグラフィ《トランスノナン街の虐殺》によって

#### とりわけ有名

- 一八三九年——ブランキの《季節社》の陰謀
- 一八四八年——二月革命と六月の反乱
- 一八五一年——ルイ・ナポレオンのクーデタに際しての抵抗と虐殺

ルイ・ナポレオンは（二月二日クーデタ）の折には、準備万端怠りなくとのえていたために、比較的簡単にバリケードのなかの民衆を鎮圧することに成功したとはいえ、彼もまたそれまでの多くの為政者同様《暴徒》のバリケードにたいして深い敵意とおさえがたい不快感を抱いていた。そして彼は、《暴徒》のバリケードを攻撃・破壊することよりも、《暴徒》がバリケードを築くことができなような条件を作りだそうと考えた。そのための最良の方法が、小さな裏通りやまがりくねった路地をつぶして道路網を整備し、軍隊が自由に行動のできる大きな広い道路を建設することであつた。<sup>(33)</sup>

以上のように、ルイ・ナポレオンは政治的・経済的・戦略的理由からパリの改造を企てるのであるが、彼の大構想を具体化し、現実のものとするには力強い協力者が必要で

あった。さいわいにも彼はオスマンという類いまれな協力者をうることができた。オスマンは「大事業に必要な頭脳と手腕をそなえた人物」であり、「過去のいかなる市長にも似ておらず、また未来のいかなる市長とも違っているであろう」望み通りの人物であった。<sup>(35)</sup>このようなオスマンに恵まれなかったならば、ナポレオン三世の夢はおそらく十分に開花しなかったであろう。

〔註〕

- (1) Francois Caron, *La France des patriotes de 1851 a 1918* (*Histoire de France sous la direction de Jean Favier*, tome 5), Fayard, 1985, p. 37.

「二月二日の経済政策「l'economie politique du 2 Decembre」という表現は Louis Girard から借用したものだ」とカロンは断っているが、その出所は不明。

- (2) *Ibid.*, p. 39.

- (3) Alain Plessis, *De la fête nationale au mur des falotés 1852-1871* (*Nonnelle histoire de la France contemporaine*), Seuil, 1973 (*Remise a jour en 1976*), p. 164.

つぎのように書いている人もいる。「ルイ・ナポレオン

の治下二〇年間で、パリは過去一五世紀間の変化よりも大きな変化をとげた。」(Suzanne Desjardins et Henriette Chander, *Napoleon III — Homme du XX<sup>e</sup> siècle*, Hachette, 1961, p. 184)

- (4) *Ibid.*

(5) 現在の大統領フランソワ・ミッテランは(グラン・プロジェ)(英語でビッグ・プロジェクト)の名のもとに都市開発をすすめる、パリを大きく変貌させようとしている。かつて新オペラ座を造らせ、新ルーヴルを完成させたのはナポレオン三世であった。ミッテランも新オペラ座を建て、ガラスのピラミッド、グラン・ルーヴルを造った。ラ・デファンスの精力的な整備も、ナポレオン三世によるマルゼルブやモンソールの開発を想起させる。元来、ミッテランは社会党出身の大統領でありながら、前大統領ジスカール・デスタン以上に反ソ・反共的で社会主義者とはいえないが、彼の(グラン・プロジェ)は、表面的にも本質的にもナポレオン三世のパリ大改造に酷似している。その意味で彼は(ナポレオン五世)と呼ばれてしかるべきである。

現在おこなわれているパリ改造を知るにはつぎの著書がよい。パリの変貌が的確に手きわよくまとめられている。

写真も豊富にとりいれられていてひじょうに便利である。

松葉一清『パリの奇跡——メディアとしての建築』講談社、現代新書、一八九〇年

- (6) Pierre Miquel, *Le Second Empire*, Duponchelle, 1979, p. 20.

Jean des Cars, *Haussmann, la gloire du Second Empire*, Ed. J'ai lu, 1980 (Perrin, 1978), pp. 272, 318 et 323.

- (7) Paul Robert, *Dictionnaire alphabétique et analogique de la langue française* (Société du nouveau Litté, 1953-1964, 6 vol. et 1 Supplément, 1970) にて haussmannien, ienne (オスマンと彼の都市計画に関係する) という形容詞と haussmannisation (オスマンの方法にしたがってある都市を「変化する」という名詞が一九七〇年に出た Supplément の「*ハUSSMAN*」)。
- この二つの辞書にはオスマンに關係する語は見当たらない。

*Grand Larousse de la langue française*, Larousse, 1971-1978, 7 vol.

*Trésor de la langue française*, publié sous la direction de Paul Imbs, C. N. R. S., 1971-, tome 1-13.

伊吹武彦他編『仏和大辞典』(白水社、一九八一年)には、*haussmannesque* (絞切型の、月並な、形式的な) という語が採用されている。

小学館ロベール仏和大辞典編集委員会編『小学館ロベール仏和大辞典』(小学館、一九八八年)には、*haussmannien* (オスマンの) と *haussmannisation* (オスマン式都市開発) という語が採用されている。

- (8) J. des Cars, *op. cit.*, p. 212.
- (9) S. Desternes et H. Chandet, *op. cit.*, p. 183.
- (10) René Heron de Villefosse, *Histoire de Paris*, Union Bibliophile de France, 1948, pp. 314 et 315.
- (11) Louis Girard, *Napoleon III*, Fayard, 1986, p. 338.
- (12) A. Plessis, *op. cit.*, p. 161.
- (13) Adrien Dansette, *Le Second Empire III. Naissance de la France moderne*, Hachette, 1976, p. 183.
- 彼が借り出した本の一冊はこの本であるとされている。
- Hittorf, *L'architecture polychrome chez les Grecs* (S. Desternes et H. Chandet, *op. cit.* p. 185.)
- (14) Georges Pradalié, *Le Second Empire*, PUF (Que sais-je ?), 1987 (7<sup>ed.</sup> mise à jour, 1<sup>er</sup> éd. 1957), p. 68.

- (15) A. Dansette, *op. cit.*, pp. 191-192.
- (16) A. Plessis, *op. cit.*, p. 161.
- (17) P. Miquel, *op. cit.*, p. 98.
- (18) *Ibid.*
- Victor Baltard (一八〇五—一八七四)——建築家、美術品修復家、水彩画家。聖ウスターシユ教会、聖オキユスタン教会の修復を行なう。彼はまた、ナポレオン三世の求めに応じ、クリミア戦争とイタリア戦争に参加した軍隊をたたえて、トロリス広場(現在のナシオン広場)に凱旋門と円形の列柱の模型を木と石膏で作ったが、模型のままで終った。(Ibid.)
- (19) G. Pradalie, *op. cit.*, p. 68.
- (20) L. Girard, *op. cit.*, pp. 22, 27, 39, 40, 43, 47, 57, 79 et 90.
- (21) Marcel Blanchard, *Le Second Empire*, A. Colin, 1950 (4<sup>e</sup> éd., 1966), p. 74.
- (22) A. Dansette, *op. cit.*, pp. 182-183.
- (23) G. Pradalie, *op. cit.*, p. 65.
- ブレシスもつぎのように書いている。「狭い迷路のような路地のあるパリの様相は一七八九年以来ほとんど変わっていないかった……一九世紀中葉のパリは空気も光もな
- (24) 5. 設備不足の不衛生な都市であつた。」(A. Plessis, *op. cit.*, pp. 160 et 162-163.)
- (25) J. des Cars, *op. cit.*, pp. 221-225.
- (26) A. Dansette, *op. cit.*, p. 183.
- (27) A. Plessis, *op. cit.*, p. 162.
- F. Caron, *op. cit.*, p. 39.
- J. des Cars, *op. cit.*, p. 215.
- 「平和がもたらバリーを世界でもっとも美しい都市にすることに専念しなければならぬ」とナポレオン一世が宣言していた……ルイ・ナポレオンがそれを実現する方法を、追放という強制された暇の間に考えるのである?……
- 一八三六年のある日、彼はニューヨークで一人の青年に出会った。この青年は地図をひろげ、彼に模範的都市の構想を示した……彼は自らに誓った(「パリに帰ったら、首都のなかの首都を再建するのだ」と)。(S. Desternes et H. Chandet, *op. cit.*, p. 183.)
- (28) Pierre de La Gorce, *Histoire du Second Empire*, tome second, Plon, 1908, pp. 58-59.
- Jean Maurain, *Baroque, ministre de Napoléon III, d'après ses papiers inédits*, Felix Alcan, 1936, pp. 212 et 506.

(29) 「ナポレオン三世の本当の動機を三段階に分けることができる……まず政治的理由……つぎに戦略的理由……最後に社会的理由がある。」(J. des Cars. *op. cit.*, pp. 214-215.)

「皇帝と知事をして首都の変貌に向かわせた理由は周知のことである。それは秩序の維持、市民の健康、失業救済、君主のプレステイージュ、旅行者の便宜、資本主義の高まりなどである。一八五六年、人口一五〇万のパリは実際窒息しつゝあった。おそらくその様相を作りなす必要があつただらう。」(Jean-Michel Gaillard, *Jules Ferry*, Fayard, 1989, p. 64.)

(30) G. Pradalié, *op. cit.*, p. 186.

(31) G. Pradalié, *op. cit.*, p. 68.

(32) A. Dansette, *op. cit.*, p. 184.

「一八二七年から四九年までの間に、パリでは八回バリケードが築かれる。」(河野健二編『フランス・ブルジョワ社会の成立』岩波書店、一九七七年、二〇九ページ)  
「パリは三五年間に九回の暴動を経験した。多すぎる。」

サン・タントワース通りは騒乱の砦である。一台の荷車を横倒しにし、それに数個のマトレスと二つの大樽を付け加えれば、五分でバリケードができあがる。このバ

リケードを撤去するには軍隊が何時間も苦勞しなければならぬ。広い通りを作ることによって、このような都合が避けられ、しかも、兵営間のコミュニケーションがより直接的、かつ、より迅速になり、治安が保ちやすくなる。」(J. des Cars. *op. cit.*, pp. 214-215.)

ダンセットによれば、道路の拡張は暴動の鎮圧にはあまり役立たなかつたということである。「一八七〇年九月四日、帝政をくつがえすのに大衆はバリケードを築く必要がなかつた。一八七一年三月パリ・コミューンの反乱が生じたのは……取り壊された古い中心街でなくて、ベルヴィルやモンマルトルの新プロレタリア集落からであつた。しかも、マカダム式道路にもかかわらずバリケードが出現したのである。」(A. Dansette, *op. cit.*, p. 187.)  
ヴァルター・ベンヤミンはオスマンのバリ改造にこのほか敵意を抱いているようであるが、『一九世紀の首都パリ』のなかでバリケードについてつぎのように書いている。

「オスマンの事業の真の目的はパリを内戦から守ることであつた。彼はパリにバリケードが永久に築けないようにすることを望んだのである。ルイ・フィリップが木の舗装を導入したのはこのような精神からであつたが、七

月革命の際、バリケードは一つの役割りを果たした……オスマンは二つの方法でバリケードを阻止しようとした。広い車道がその構築をさまたげる筈であり、また、貫通した新しい道路が軍隊を兵営から労働者街へひじょうにすばやく送りこむ筈であった。同時代人はこの事業を「戦略的美化」と名付けた……

パリ・コミューンがバリケードを復活させた……バリケードはグラン・ブルヴァールを遮断し、しばしば二階に届くほど高くなり、本場の塹壕となった。」(Walter Benjamin, 《Exposé de 1935》, *Paris, capitale du XIX<sup>e</sup> siècle*, Traduit de l'allemand par Jean Lacoste d'après l'édition originale établie par Rolf Tiedemann. Les Editions du Cerf, 1989, pp. 44-45.)

(34) M. Blanchard, *op. cit.*, p. 75.

(35) P. de La Gorce, *op. cit.*, p. 59.

## 二 一 「ボナパルチスト、オスマン」

オスマンは〈皇帝〉の意図を深く理解してその構想を忠実に具体化し、完璧に近いといえるほど彼の期待に応えた。オスマンがあつたからこそバリ改造は大成功をおさめ、パ

リは一九六〇年代末までの一〇〇年の間、世界でもっとも美しい首都の地位を保ち、花の都として世界中の人々の憧れの的となつたのである。しかし、バリ改造に関しても人格的な面に関しても、彼にたいする評価はがいて低く、彼にたいする批判や非難や中傷は数限りがない。「オスマンには良家の召使のような厚かましきがある。彼は時にグロテスクなほど仰々しく自分をさらけ出す性癖がある」と批評されたり、あるいは、「彼は道徳的にいかがわしく……皇帝に娘を提供した<sup>(2)</sup>」という事実無根に近い露骨な中傷を浴びたりした。そして、彼の能力を高く評価する賛辞のなかにも、かならず彼を傷つけるトゲが隠されていた。「やはり彼は、強固な知力、素早い頭の働き、ねばり強い活動、激しい悪賢い巧妙さ、活力、果敢な完全さなどによって称賛に価する。こういうものがなかったら、あれほど執拗に妨害された事業を全うすることはできなかったであろう」と<sup>(3)</sup>。

アルザス出身のプロテスタント(ルーテル教徒)の家庭に生まれたオスマンは、しばらくの間弁護士をつとめるが、一八三〇年オルレアン公の庇護をうけて行政職に転じ、以後、ヴィエンヌ市事務総長(一八三一—一八三三)、オート

・ロワール県イサンジョー郡長（一八三三）、ロー・エ・ガロンヌ県ネラック郡長（一八三三—一八四〇）、アリエージュ県サン・ジロン郡長（一八四〇—一八四二）、ジロンド県ブレ郡長（一八四二—一八四八）などをつとめた。一八四八年の二月革命のときにはレピュブリカンと呼ばれることに同意したが、同年二月一〇日の第二共和国大統領選挙の際には、「生まれながらの確信的帝政主義者」として、ルイ・ナポレオンの当選のためにジロンド県会議員として活躍した。ジロンド県においてナポレオン支持が七八パーセントの高率に達したのは彼の活躍の成果であった。彼はルイ・ナポレオンからその能力を高く評価され、深い信頼をよせられて、一八四九年、共和派の勢力の強いヴァール県の知事に任命された。そして、同年五月の立法議会選挙において保守派を勝利にみちびいた。この功績を買われて一八五〇年五月にはイヨンヌ県知事に任命される。このとき、「ルイ・ナポレオンと秘書モカールは彼につきぎのように説明している——イヨンヌ県はポナバルチスト党がもつとも力の強い県の一つであるから、イヨンヌ県知事は信用のおける人物にしか任せられないのだ」と。

一八五一年一月、彼は長い間望んでいたジロンド県知

事に任命された。そのとき、彼はすぐに任地に行かないでイヨンヌ県庁所在地オセールにしばらくとどまり、さらに家庭の事情のためにパリに立ち寄った。クーデタの前日の二月一日のことである。クーデタ直前であることをまったく知らないまま、彼は感謝の意をあらわすためにルイ・ナポレオンに会いにでかけた。大統領は、内務大臣に会った後できるだけ早く任地に行くようにと彼に依頼した。内務大臣とは、クーデタの重要な仕掛人のひとり、ルイ・ナポレオンの異父弟モルニ侯爵である。オスマンはモルニから指示を受けてすぐにボルドーに向かった。しかし、彼がボルドーに到着したのはクーデタがすでに完了した一二月三日の夕刻であった。パリでは、共和派にたいする労働者や民衆の失望・幻滅からバリケードの戦いはあまりつづかず、一二月四日には抵抗は完全に鎮圧され、クーデタが成功していた。しかし地方ではクーデタにたいする反発が強く、二〇以上の県で武装蜂起がみられた。そのため三二の県に数か月間戒厳令がしかれ、將軍と知事と検事から成る一種の臨時裁判所が各県に設けられ、多くの「暴徒」が追放・流刑・監禁の刑に処せられた。オスマンが赴任したボルドーも「不穏な都市」であることに変わりなかった。し

かし、彼は到着するやすぐに精力的に秩序維持につとめ、四日と五日に行なわれたデモを、拡大する前におさえこむことができた。

二月二日には、クーデタを承認させるための国民投票が行なわれ、ルイ・ナポレオンは七〇〇万票の賛成、わずか六五万票の反対という圧倒的支持をうけることになるが、この投票のとき、棄権票の多くなることを恐れたオスマンは、〈赤〉や〈極左〉にたいする恐怖心をかきたてる内容の回状を作成して、ジロンド県内の郡長や市町村長に送り、賛成票をふやすことにつとめたのである。

二月二日というのはナポレオン一世が一八〇四年に戴冠式を挙行した日であり、また、一八〇五年に、ロシア皇帝アレクサンドル一世とオーストリア皇帝フランツ一世の連合軍にたいして、オステルリッツで大勝利をおさめた記念すべき日である。甥のルイ・ナポレオンは一八五一年のこの日を選んでクーデタを企て、翌年の二月二日にはナポレオン三世として帝位につき、ナポレオン朝再興という長年の夢をかなえるのであるが、その直前の九月から一〇月にかけて、国民の反応を確かめるために地方遊説に出かけた。出発した翌日の九月一五日には、早くもブルジュ

で、ヌー將軍が整列した兵士の前で〈皇帝万歳！〉と叫んだ。ルイ・ナポレオンはまだ帝位についていないにもかかわらず、〈皇帝万歳！〉という叫び声が遊説中いたるところであがり、その声は彼がボルドーに到着した一〇月七日最高潮に達した。彼はボルドーに一〇月一〇日まで滞在し、九日の商業会議所歓迎晩餐会においては、「帝政、それは平和である」という有名なことばを発して、帝政復活の意志を表明することになるが、このようなことばが不自然にきこえないほどボルドーは帝政復活期待の空気にみたされていた。そして、この雰囲気作りに大きく貢献したのがほかならぬオスマン知事だったのである。

強制されたわけでもなく、また、出世のために節をまげたわけでもなく、いわば帝政への彼自身の好みから、このような雰囲気作りに成功したにすぎないとはいえ、オスマンはたびかさなる貢献によってルイ・ナポレオンの絶大な信頼を勝ちえた。それゆえ、モルニ公の後を継いだ内務大臣ペルシニーがオスマンをセーヌ県知事に推挙したとき、ナポレオン三世はこれをすぐに承認した。そして、一八五三年六月二日の政令によって、オスマンはフランスの首府パリをふくむセーヌ県知事となったのである。



前知事ジャン・ジャック・ベルジェは、一八四八年から約五年の在任中、リヴォリ街、エコール街、ストラスブール通りなどを完成し、パリの整備と美化につとめたが、事業費に関し、財政的均衡を重んじるばかりか黒字決算を好み、そのために、ナポレオン三世同様借入金による大事業を好んだベルシニーに敬遠されたのである。しかし、ベルシニーはベルジェをオスマンにかえたからといって、かならずしもオスマンに好感を抱いていたわけではなかった。彼はその『回想録』につきのように書いている。<sup>(8)</sup>

「奇妙なことに私をひきつけたのは、彼の顕著な知的能力というよりは、彼の性格的欠陥である……私の前には当代のもっとも異常な人物のひとりがあった。彼は背が高く、たくましく、力強く、エネルギーで、あると同時に巧妙で狡猾な策士であった。この大胆な男は、自分がどんな人間であるかを明かすことを恐れなかった……頑健な背骨と太い首、大胆で敏腕、そして、策略と陰謀には策略と陰謀で対抗することのできる、このたくましい闘技士はかならず成功するであろう」と私は思った。」

このようにオスマンは、(性格的欠陥)はあるものの(狡猾な策士)であるがゆえに、ナポレオン三世のために十分役立つ協力者になりうると見込まれ、名譽あるセーヌ県知事に抜擢されたのであるが、幸いなことにオスマンもまた、パリ改造の大事業をおしすすめるにあたって第一級のすぐれた協力者をもつことができた。すでに名前をあげた建築家のバルタールをはじめ、ブローニユの森、モンソー公園、ビュット・シヨモン、リシャルル・ルノワール通り、アヴニュー・オブセルヴァトワールの建設に才能を発揮した土木技師ジャン・シャルル・アルファン、パリの下水道システムの建設、モンスリ水源地の建設、パリの上水道の整備などに大きな貢献をした水理学者・地質学者ウジエヌ・ベルグラン、さらには建築家のバリエー、デュック、ダヴィユーなどである。<sup>(9)</sup>

〔註〕

(1) A. Dansele, *op. cit.*, p. 190.

(2) M. Blanchard, *op. cit.*, p. 75.

J・デ・カールはオスマンの二女ヴァランチヌとナポレオン三世の関係は事実無根、単なる中傷とした上で、

- 当誌の巻評をとりあげよう (J. des Cars, *op. cit.*, pp. 316-318.)
- (3) J. des Cars, *op. cit.*, p. 213.
- (4) A. Dansette, *op. cit.*, p. 191.
- (5) J. Maurain, *op. cit.*, p. 107.
- (6) 二月二日ターネタに際してのオスマンの行動や貢献についてはその著作を参照。
- Gerard-Noël Lameyre, *Hausmann "Préfet de Paris"*, Flammarion, 1958, pp. 22-24.
- Catherine Salles, *Le Second Empire 1852-1870 (Histoire de France illustrée/2000 ans d'images, Rédaction Alain Melchior-Bonnet avec le concours de Pierre Thibault)*, Larousse, 1985, pp. 6-14.
- A. Dansette, *op. cit.*, p. 191.
- (7) ナポレオン大統領の地方遊説についてはその著作を参照。
- F. Caron, *op. cit.*, p. 19.
- A. Dansette, *op. cit.*, p. 191.
- C. Salles, *op. cit.*, pp. 14-19.
- G. Lameyre, *op. cit.*, pp. 25-28.
- L. Girard, *op. cit.*, pp. 181-182.
- (8) A. Dansette, *op. cit.*, pp. 187-188 et 191.
- Jean-Jacques Berger (1790-1859)
- Persigny (1808-1872) —— 内務大臣 (一八五二—一八五四) 一八六〇—一八六三) やロンドン大使 (一八五五—一八五八、一八五九—一八六〇) をとめる。ルイ・ナポレオンによる一八三六年のストラスブールの反乱、一八四〇年のプロニーユの反乱に参加。
- (9) A. Dansette, *op. cit.*, p. 190.
- (10) オスマンの協力者についてはその著作を参照。
- J. des Cars, *op. cit.*, pp. 228 et 235.
- M. Blanchard, *op. cit.*, p. 75.
- A. Dansette, *op. cit.*, p. 223.
- Jean Gay, *L'amélioration de l'existence à Paris sous le règne de Napoléon III*, Droz, 1986, p. 22.
- R. Héron de Villefosse, *op. cit.*, p. 315.
- Jean-Charles Alphand (1817-1891)
- Eugène Belgrand (1810-1878)
- Théodore Ballu (1817-1885) —— サント・クロチルド教会やトリニテ教会を建て、サン・ジャック塔を修復。
- Joseph Louis Duc (1802-1879) —— バスチーユ広場の七月記念柱の建立や裁判所の建設に関与。

Gabriel Davioud (1823-1881)——ブローニュの森の建設に関与。サン・ミシエルの泉、数多くの小公園の建設、美化、シャトトレ広場の二劇場の建設などを行なう。

(拙稿は一九九〇年度成城大学特別研究助成にもとづく共同研究《近代西欧社会の経済と文化》の研究成果の一部である。)